平成18年度第3回郷土研究講座

平成18年11月18日(土)
佐賀県立図書館大会議室

佐賀城下に弥次さん喜多さんが！

～新発見の蒲原大蔵の小説から～

講師　佐賀大学名誉教授　田中　道雄さん

平成18年5月、太良町糸岐の旧家新宮家に所蔵されていた古文書の中から蒲原大蔵（一編舎十九）自筆の滑稽本「膝栗毛附録」が当館の調査によって発見されました。

このため、第3回郷土研究講座ではこれまで蒲原大蔵の作品を研究されてきた田中道雄さんに蒲原大蔵と「膝栗毛附録」についてわかりやすく講演していただきました。

1．蒲原大蔵とその作品について

蒲原大蔵は天明3年(1783)に生まれ、婿養子として蒲原家に入りました。佐賀藩の着座（家老に次ぐ家格）でしたが、48歳で隠居し、その後戯作作家として「伊勢道中不案内記」などの多くの滑稽本を残しています。

どの作品も映画やビデオを見るように生き生きと描かれており、読んだあとにすがすがしさが残ります。これは、作者の生きる姿勢、心がまえの格調の高さによるものだろうと思います。

2．「膝栗毛附録」について

今回発見された「膝栗毛附録」は、蒲原大蔵の自筆本で上下2巻、作品の内容から1853年（嘉永6年）の成立とみられます。題名からもわかるように有名な十返舎一九の「東海道中膝栗毛」の続編になぞらえたもので「弥次、喜多」（「野次郎兵衛、北八」と表記）の二人が登場し、佐賀城下の角屋という旅館で巻き起こす騒動を描いたものです。

二人はまず呉服屋の旦那と番頭になりすます趣向で宿入りします。北八が風呂で「われがね」のような声で浄瑠璃を唄うと、風呂をたいていた下女が泣き出します。北八は自分のよい声で悲しくなったのだろうとさも自慢そうに言いますが、雁もどきが咽につかえて死んだ父の声に似ているのでやめてくれと下女が返します。

夕食時には「めかじゃ」「海たけ」「むつ五郎」が出てきますが、旦那役の野次郎兵衛は北八の計略で思うように食べることができません。

空腹のため野次郎兵衛は夜中に勝手（台所）にあった翌日の経参りの弁当を食べ散らかしますが、下女に見つかり、逃げようとして土間に落ちます。その時、下女には犬猫や馬のせいだと誤魔化してしまいます。

翌朝、女将から川上に経参りを勧められて出かけますが、その途中で出会った町中の学者を「あの様にきたなひなりをせぬと学者らしく見へねへ」とか、書物ばかり見て世の中のことを本当は何も知らないのに自分ひとり知ったかぶりしているとその姿を皮肉って終わっています。

作品全体として充分まとまっているとは言えませんが、部分的には佐賀の当時の情景や社会状況をよくとらえています。また、おもしろおかしく描きながら、時に人間批評を織り込みながら写実的に表しています。

佐賀にこのような笑いの文化の伝統があったことをぜひ認識して欲しいものです。

（文責：県立図書館）